専門主義の野蛮性について(一)

――現代哲学に於ける「知」と技術との背反――

山口惠三

―感覚的なものを通して非感覚的なものを対象にするといふこと、これは学問と名のつくかぎりのものが等しく遂行してゐることである。それゆゑ、あまりに軽々しく非感覚的なものに不信を表明する人は、学問一般への背信を宣言することになる。

今道友信―

俗は高貴なる精神をけつして理解することはない。

哲学は常に此の諦念を前提し、かかる絶望から歩み始めねばならない。哲学が万人に開かれたものであり、疑ひもない普遍性、高度の一般性に於てこそあり得るものであることを些かも否定するものではない。大衆こそ純朴にかつ純粋に生き、愛し、苦悩し、かの真性の知を索めてゐるといふこと、現実の生活から生れる叫びのみが、如何なる権威よりも雄弁に物語るであらうこと、その一面の真実に眼を閉ざす訳ではない。だが、そもそも「生活」とは何か、「現実」とは何か。それが闡明されぬ限り、叫びも単なる苦悩の訴へか実存的独白に終始することとなり、自己を越える者との対話を知らぬ独白によつてでは、哲学の地平は拓かれぬであらう。「生活」なるものが、文字どほり凡そ生あるものの生きとし活ける営みの謂ひに留るならば、それは生物学的存在者としての人間が、自然から被る因果必然性の追認にしか過ぎず、その「現実」なるものも単に現実と想ひなされたもの、現実といふ名の仮象に他ならなくなりはしないか。更に、生きるといふことが、ただそれだけで価値を有するとするなら、さうである根拠が論理的に明示されねばなるまい。その際、「生命の尊厳」といつた美辞麗句によつては何も得られぬことを知る必要がある。自らの生を絶対化しようとする想ひなしは、個人の自己義認、自己聖化をも越えて、遂には人類全体のアロガンティアにまで至るに違ひない。「ただ生きるといふことではなく、よく生きるといふことこそが問題なのだ」(『クリ

トーン』48b）といふソークラテースの言葉に今一度耳を傾けねばならない。

如何に「生ける現実」と云ひ「現実せる現実」と云つても、ただそれだけでは現実と生とが関はりあふ現場を説明したことにはなるまい。「現実が現実する」だの「現実せる現実」だの云ふ心情の表明が非生産的な同語反復に過ぎないとすれば、我々はそれとは別の方途によつて実人生が如何に現実と関はりあふのかを考へねばならない。そして、生が現実と出会ふ有様を知と名付けるとすれば、「知」の根源的な構造を解明することによつて「現実」と「生」との抜差しならぬ状況も見えて来るものと想はれるので、本稿では「知」の構造を哲学の今日的状況をも顧みながら、少しく考へてみようと想ふのである。

（一）

人間の思惟は、与へられた対象をあるが儘にそれ自体として認めようとするものではない。カントの云ふところのDing an sichを不可知であると了解するか否かには関はらず、事物の点的現在に於ける現れ、事象の謂はば表層の局面に安住することはなく、その根拠を問ひ、それが更なる問ひを誘発せずには止まない。このやうに根拠に向かつて無限に進まうとするのは、理性が自らに課した宿命であるが、我々はかかる事態を「理性は事物の背後に立廻らうとする」とヘーゲルに倣つて云ふことも出来るであらう。さうした人間理性の知の姿は、もともと何者によつても限定されることなく、思惟することの限界を知らぬところのものである。しかるに、停ることを知らぬ理性は、他ならぬその理性自身のさうした姿にも満足することなく、更に自らの背後に廻り込まうとする。その為、理性は自らが際限もなく根拠の根拠、云はば絶対的な根拠（ἀρχή）へと突進まうとする、といふ事実を認めようとはしない。何故なら、些か逆説めくが、理性がἀρχήへと突進まうとするといふ当の事実もまた理性にとつては、他の事実と同じく表層的な事実として現れる以上、そこでも理性の本性は事物の背後に立廻らうとするからである。人間にとつて「現実を有るが儘に捉へる」とか「事物を端的只今の現実に於て見る」といつたことが、謂ふは易く実際には極めて困難であるのは、理性の世界認識の構造が以上のやうなアポリアを自己の内部に不可避のものとして予め保有してゐるからにほかならず、ヘーゲルの弁証法なるものの存在理由も本来は、理性が外物を知覚する際のかかるアポリアからの脱出にあつたものと想はれる。[1]

我々が通常「知る」と云ふとき、意識すると否とに関はらず、「『知つてゐる』といふことを知つてゐる」といふ自己

意識が前提されてゐるものと想はれるが、そのやうな意味での「知」は、以上のやうな文脈で考へられる限り、必然的に自己自身の知への自己認知、自らの知そのものに対する自己認定を伴ってゐることは云ふまでもない。さうした自己認知、或いは自己認定なるものは、それ自体では、人間理性の本性から来る当然の帰結とも云へようが、それが無条件に人間の自己義認、自己聖化へと変質して行くことこそが、ここでの大きな問題である。我々の自己が、無限に自己自身の存在を主張し続け、遂には世界そのものと自己自身とを重ね合はせるといふ、一種の独我論的自己拡張を続ける理由が、これまた逆説的ながら、自己が本来ひとつの欠如であることにその根拠があることは、private が語源的には「欠如」ないし「欠落」を意味してゐたことからも分るであらうし、さうした自己義認、自己聖化が、時として世界の現実を解し得ぬ愚かしい態度とも見為されるのは、idiot の語源の ἰδιότης が、「自己」を意味する ἴδιος からの派生形であることによっても知られるであらう。「愚者」なる言葉は、単に無知の者を意味することも可能であるが、それよりも自己の無知を認め得ぬ者、自己の内部の無知を知と想ひなし、不知を知と想ひ誤ってゐる者をこそ謂ふのであらう。さうした錯認、自己錯覚が生じて来た理由について考へてみるに、無知そのものが直ちに知と取違へられたのではなく、或る一つのことについての知が、その「或る一つの」といふ限定を離れて「知」そのものと混淆し、混同されたのであると想はれるのである。[2]

そのやうな混淆、もしくは混同が何によって結果したのか、といふこと自体が大きな問題であるが、それはともかく、ここで忘れてならないのは、かかる想ひ為しが単に個人の内部の私的事件には留らず、時代的、地域的な伝播性を有するといふことである。つまり δοκεῖν が非人称動詞として用ゐられて δοκεῖ μοι といふ姿で現れて来るとき、その δόξα は集合的に εὐδόξα として、特定のヒュポダイムを形成することになるからである。廣松渉氏が明瞭に指摘されてゐるやうに、哲学の使命はヒュポダイム批判にあるのであるから、[3] 今や随所に見られる「知」を廻る錯認が、特に学術研究のどのやうな局面に顕著なものであるのかについて以下に考察することにする。（以下次号）

註

（1） Vgl : G. W. F. Hegel, *Phänomenologie des Geistes*, IV. selbstbewußtsein.

（2） 加藤信朗「知と不知への関はり」（『理想』第六〇一号、一九八三年）参照。なほ、此の論文は、同じ著者による『初期プラトン哲学』（東京大学出版会、一九八八年）の第二章に収録されてゐる。

（3） 廣松渉『新哲学入門』（岩波新書）一九八八年、四頁。